

【研究ノート】

福岡県下における弥生時代の掘立柱住居群

中尾 祐太

1. はじめに

弥生時代における建築様式は、大きく竪穴住居と掘立柱建物の2種類に分けられる。竪穴住居は、その名称が示すとおり住居建築の典型例で、後期旧石器時代からつくられはじめ、縄文時代には汎列島の展開する。小稿が対象とする弥生時代はもちろん、歴史時代の前半期においても住居として主流をなす建物であった。掘立柱建物の出現は竪穴住居より遅く、弥生時代以降に普及する建築様式である。このうち、地表面を床とするものが平地式建物で床面を高い所に設けたものが高床式建物である。このうち高床式建物については、その構造上の利点から主に倉庫として使用されていたと考えられている。

上述したとおり、基本的に古代日本の一般的な住居建築は竪穴住居であったと考えられるが、調査の蓄積により多くの集落が検出された結果、弥生時代においても掘立柱建物群を住居として使用していたと思われる集落が増加している。本研究は、そのような掘立柱住居に関して、以下に挙げる問題点を明らかにすることを目的とする。

2. 掘立柱住居の研究史

掘立柱建物が住居として使用されていた可能性は先学によりすでに検討されている。広瀬和雄氏、小笠原好彦氏は古墳時代の遺跡の検討から、建築技術の独占の結果、掘立柱建物には支配者層が居住するようになったと推測しており(小笠原1979・広瀬1978)、武末純一氏は、掘立柱住居の重要性を指摘

したうえで首長居宅形成の動きについては弥生時代にさかのぼって検討する必要性を指摘している(武末1987)。その後、弥生時代・古墳時代の大型掘立柱建物の検出例が相次ぎ、上記の見解に根差した論考が多く出されている。その他、掘立柱建物が群をなし普遍的に住居として使用されていた一般集落は石野博信氏により紹介されている(石野1995)。石野氏は掘立柱建物が集中して検出された鳥取県の青木遺跡を挙げ、これらをすべて倉庫とすることの不自然さを指摘し、これらは掘立柱建物を住居とする一般的な掘立柱集落と推定している。また、宮本長二郎氏は、低湿地に立地する集落を、高床建築の住居と倉庫で構成される高床集落と表現しており、その具体的な例として福岡県湯納遺跡を挙げている(宮本1996)。

以上のように、掘立柱建物が住居として採用されるのは、弥生時代にまで遡る可能性が強くなったが、弥生時代における掘立柱住居群の例がでてきた以上、その採用の経緯については改めて検討する必要があるだろう。その際、地域的な差異や個々の遺跡がおかれる地理的環境に立脚した検討を要するのはいうまでもない。したがって、ひとまずここでは現在筆者が認識している掘立柱建物を住居として使用していたと考えられる福岡県下の遺跡を個別に紹介するとともに、その総体として若干の検討を行いたい。

3. 掘立柱住居群の諸例

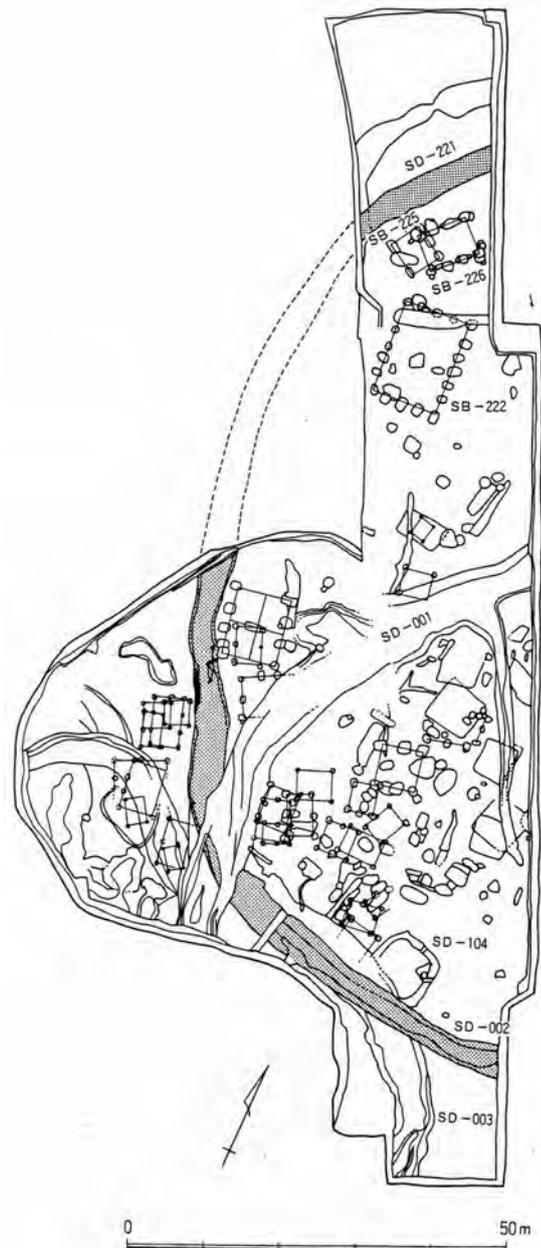
ここでは、掘立柱建物を住居として使用していたと考えられる3遺跡を列挙し、個別に検討を加えたい。

雀居遺跡 福岡市に所在する雀居遺跡は、低地に立地する遺跡で、弥生時代早期以降、洪水などの自然作用を絶えず受けて幾度となく地形が変化していることが確認されている。また、遺跡内で古墳時代前期の竪穴住居を検出した際、下部から水が浸み出していたことが報告されており、それゆえに木製品その他の遺物が多く出土している。いかに竪穴住居に不向きな場所であったかが分かる。

雀居遺跡からは、弥生時代後期の掘立柱建物跡が確実なもので38棟分検出されている。竪穴住居が12棟前後であるのに対し、約3倍の数をほこる。

調査区の最南端に位置する第4、5次調査区からは弥生時代の29棟の掘立柱建物が検出されている(第1図)。個別にみると面積に統一性はなく、最小のもので6.62㎡、最大のもので102㎡と差があることから、全てが同じ用途であったとは考え難い。全国でも有数しか検出されていない100㎡を超える超大型建物SB222、それに次ぐ63㎡の大型建物SB50も検出されている。

第4、5次調査区の北西に位置する第7、9、10、12、13次調査区からも弥生時代の掘立柱建物跡が検出されている。確実なものは9棟とされるが、遺構をみる限り、少なくとも20棟弱は建っていたことが想定される。一帯は遺構の検出状況から、東と西に分けることができるが、掘立柱建物跡は全て西地点から検出されている。東地点からは、竪穴住居跡と考えられる柱穴が検出されている他、西地点の掘立柱建物群の南で4棟の竪穴住居が検出されている。しかし、掘立柱建物の数と比べると極めて少なく、建物の主体は掘立柱建物であったと考えられる。また、東地点と比較すると西地点から極端に多くの遺物が検出されていることも明らかになってい



第1図. 雀居遺跡第4次・5次調査地点(縮尺1/1000)

る。こうした点を踏まえると、掘立柱建物を住居として使用していた可能性は強く、近接する第4、5次調査地点の掘立柱建物群についても同様に考えることができるだろう。

以上のように、雀居遺跡においては、掘立柱建物が住居として使用されていたと想定しているが、最たる理由としては前述した立地的環境に起因するものと思われる。類例は糸島市に所在する弥生時代終末期～古墳時代初頭の玉工房として知られる潤地頭

給遺跡の中期の集落が挙げられる。掘立柱建物10棟以上と甕棺墓群が検出されているが、竪穴住居は1棟も確認されていない。掘立柱建物はそれぞれ小群を構成している。

吉武高木遺跡 福岡県福岡市西部の室見川流域の左岸の低丘陵上に所在する。遺跡群の時期は旧石器時代後半から中世におよび、特に弥生時代の遺構・遺物が多く確認されている(第2図)。遺跡群の全体を



第2図. 吉武遺跡群における弥生時代の遺構配置(縮尺 1/5000)

知ることはできないが、現在分かっている範囲で全体を見ると生活遺構は大きく北と南に二分することができる。

北の居住域は1次調査地点、2次調査地点に集中している。1次調査地点Ⅱ区からは、前期から後期にかけての竪穴住居が31棟検出されている。(前期3棟、中期20棟、後期8棟)。対する掘立柱建物は、中期から後期にかけてのものが33棟検出されている(中期26棟、後期7棟)。Ⅱ区の東に位置するⅣ区からは、前期末の竪穴住居17棟と中期の竪穴住居・掘立柱建物がそれぞれ7棟検出されている。1次調査地点に南接する2次調査地点からは、中期の竪穴住居が3棟、中期から後期にかけての掘立柱建物が40棟検出されている(中期19棟、後期21棟)。この他、同調査区からはまとまったの検出ではないが、3棟確認されている。南の居住域は、4次調査地点周辺に展開する。検出された生活遺構は中期の円形竪穴住居6棟、中期から後期の掘立柱建物44棟である。他の遺構の検出状況からみてほとんどが後期に属することが推測される。

北と南の共通点として両者ともに居住域における掘立柱建物の比率が高いということが挙げられる。北の1次調査地点の中期以降の竪穴住居と掘立柱建物の比率は中期が竪穴住居27棟に対して掘立柱建物33棟、後期が竪穴住居8棟に対し掘立柱建物が7棟となっている。2次調査地点に関しては、ほとんどが掘立柱建物によって構成されている。南居住域も同様で、中期～後期にかけての建物はほとんどが掘立柱建物で構成されている。集落の時期的な変遷を遺構の検出状況からみると、前期末～中期初頭に画期があり、それに伴い掘立柱建物が急増したことが分かる。

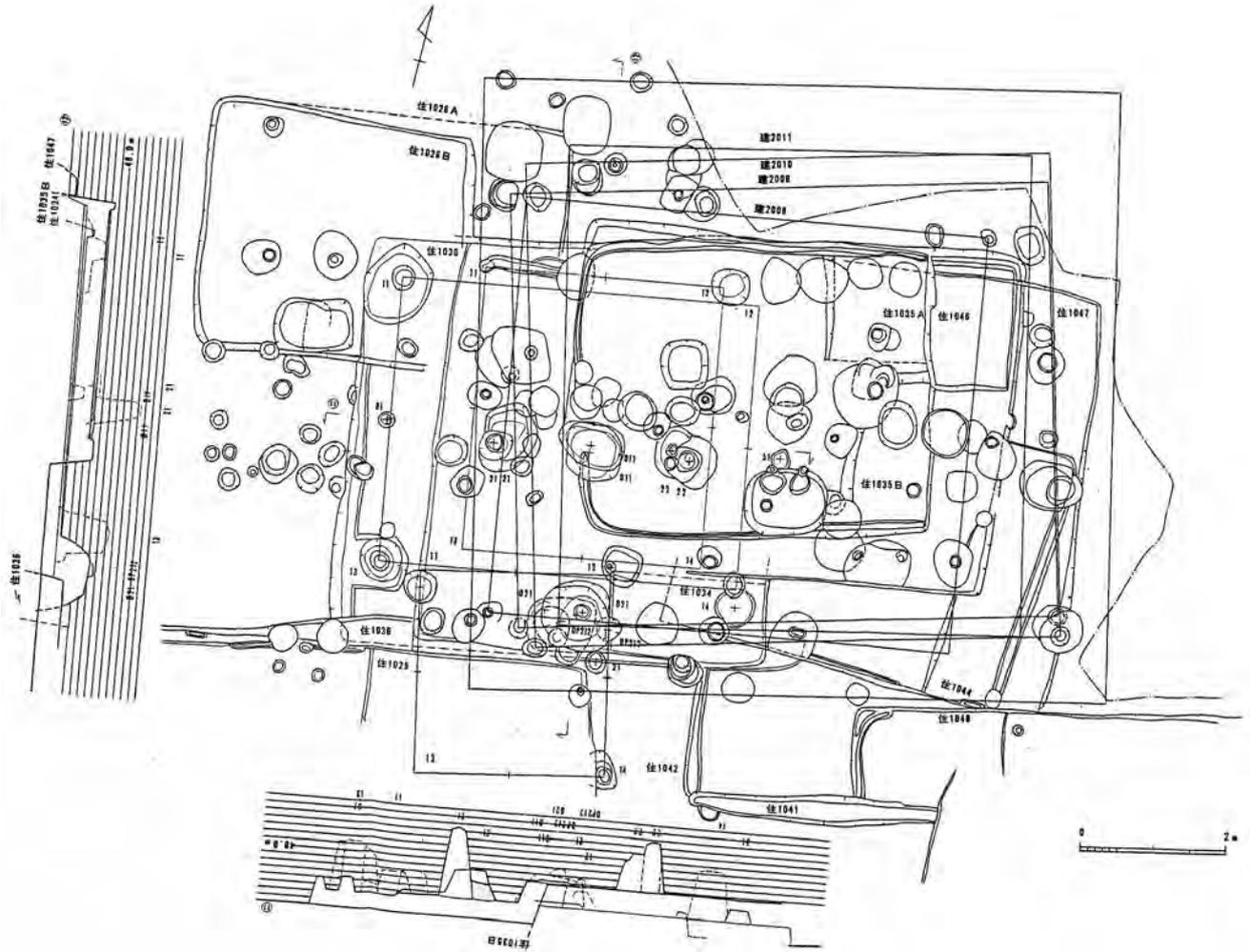
この点については、報告者によって吉武高木遺跡に近接する東入部遺跡から興味深い検討が試みられている。以下、報告に従い記述する。微高地に立地する東入部遺跡は約4000㎡を測る弥生時代集落が完掘調査された例である。集落は弥生時代前期末から中期前半にかけてのもので、時期は3時期に区別される。その生活遺構を時期的に大別すると以下のようになる。

- ・1期(前期末) 小型の円形竪穴住居跡3棟に貯蔵穴と考えられる土壙が複数伴う
- ・2期(中期初頭) 大型の円形竪穴住居跡3棟に梁間・桁行が1×5間の建物3棟が伴う
- ・3期(中期前半) 3×4間の掘立柱建物3棟に1×2間の掘立柱建物3～4棟伴う

3期になると、2期に竪穴住居であったものが掘立柱建物に替わるが、床面積が2期の竪穴住居とほぼ同じであり、竪穴住居と掘立柱建物で形式は異なるが住居であったと考えられている。

筆者自身、この検討は首肯すべきと考えており、一集落の動態を把握するうえで、重要な指摘であると考えている。もちろん、吉武遺跡群と東入部遺跡を一体のものとするには距離的な問題もあるが、中期における画期と掘立柱建物の増加現象に関しては、関係を認めてもよいのではないだろうか。また、具体的な検討は今後の課題とするが、掘立柱建物で構成される2次調査区、4次調査区は掘立柱建物数棟1単位でグルーピングできそうである。以上の点から中期以降、吉武遺跡群においては掘立柱建物を住居として使用していたと想定している。南の居住域に掘立柱建物が集中している点については、北部の墓域は副葬品を持つものが少ないのに対し、南部の墓域は、青銅製武器、多紐細文鏡、玉類などを多数副葬する甕棺墓と木棺墓からなる点や、国内でも最大級の大型掘立柱建物が所在することに関係するものと思われる。

以来尺遺跡 以来尺遺跡は、福岡県筑紫野市大字筑紫野に所在する複合遺跡で、弥生時代後期を中心とする。以来尺遺跡の特徴として挙げられるのは、丘陵の広い平坦面をもつ丘陵先端面に集落を営み、さらなる平坦地の確保のため、斜面を削平して、段造成している点である。以来尺遺跡は北の方が高く、南にいくに従い段々と低くなっている。平坦面の竪穴住居は個別に見るまでもなく、概観しただけでも、やや大型のものが多数を占めているということが分



第3図. 以来尺遺跡建物2011号群・住居1044号群(縮尺1/100)

かる。具体的に両者の竪穴住居の床面積をみても、平坦面は約24㎡～約67㎡を測るのに対し、斜面は約8㎡～25㎡である。斜面の竪穴住居に関しては、ほとんどが全面の規模が分からないものであるが、残る部分から推察しても、大型のものはほとんどないと考えることができる。

以来尺遺跡の特徴として挙げられるのは、各建物の建て替えである。特に平坦面の南から斜面にかけては、住居が幾度となく建て替えられたことを確認することができ、それらの重複関係が旧・新関係で複数棟におよんでいることから、「強い規制の継承」と「回帰性」が指摘されている(秦1997)。基本的に住居は住居に掘立柱建物は掘立柱建物に位置を踏襲していることが多いが、2011号掘立柱建物群・1046号住居群(第3図)のように、両者が混合し、数棟にわ

たって重複している遺構も存在する。このように、その「強い規制」を継承しつつ、住居の建て替えのサイクルのなかに掘立柱建物があることを考慮すると、その過程において、掘立柱建物を住居として使用した時期があったと考えられる。また、このことを考慮すると、規制に従い同一地点で何度も建て替えられている掘立柱建物のなかにも住居として用いられていたものがあった可能性も十分考えられる。

複数棟にわたる重複関係によって、以来尺遺跡の住居、掘立柱建物の同時併存関係を捉えるのは難しく、これ以外の積極的な根拠はないが、平坦面に所在する10号掘立柱建物や23号掘立柱建物のような大型掘立柱建物は他の掘立柱建物からは傑出しているが、平坦面の竪穴住居には同じ規模のものがあることを付記しておく。

4. 検討

3において、福岡県下の遺跡から3遺跡を挙げ、それぞれが掘立柱建物を住居として使用していた可能性を述べた。ここでは、これらを総体でみて、共通点・相違点を抽出し、若干の検討を加えたい。

まず、大きく異なる点として、それぞれの遺跡が所在する立地が挙げられる。雀居遺跡は低地、吉武遺跡群は低丘陵(扇状地)、以来尺遺跡は丘陵上に立地する。掘立柱建物の住居例は近年、全国的にその可能性が報告されているが、最も多いのは低地の集落であり、これは水稲耕作の必要性によるものと理解できる。ここで挙げた雀居遺跡の場合も、後述するようにその他の要因も含めて考える必要があるが、水稲耕作の必要性による低地の占拠が最たる理由であると考えられる。対する吉武遺跡群、以来尺遺跡はそれぞれ低丘陵・丘陵上に立地する。吉武遺跡群の場合は掘立柱建物の増加には東入部遺跡の集落動態の画期と連動するものと想定しており、立地環境には即さない他の理由が考えられよう。以来尺遺跡についてもやはり他の理由によるものと思われる。その理由については、個々の遺跡のみでの判断は不可能であるため、東入部の例も踏まえて平野単位・周辺地域との関係で考える必要があるだろう。その点については今後の課題としたい。

次にこれらの共通点であるが、ここで挙げた3遺跡からは、いずれも大型建物が検出されている。池上曾根遺跡の大型建物の検出以降、大型建物が注目を集めるようになり、性格に関しては議論があるが、いずれにしても拠点集落における一つの象徴としての側面が強調されている。ここで挙げた3遺跡の各大型建物も機能的には異なると考えられるが、そうした建物・建築技術を有する集落において積極的に掘立柱住居が採用された可能性は十分に考えられる。特に雀居遺跡・吉武遺跡群において大型建物周辺に掘立柱建物が集中している。また、吉武遺跡群では、居住域とともに墓域も南北で分かれているが、掘立柱建物で構成される南居住域の墓域では、多くの副葬品が確認されている。この点は、はじめに述

べた先行研究でも述べられているように、一部の「有力集団」による掘立柱住居の採用と考えられる。しかし、両者ともに大型建物周辺のみではなく周囲の一般的な居住域と考えられる場所からも掘立柱建物が集中して検出されている。雀居遺跡の場合は立地的環境によるものと考えられるが、吉武遺跡群の2次調査地点の建物群は、副葬品をもたない墓域に帰属する一群と想定されるうえ、個別にみると3、4棟の建物で構成された小グループによりなっていた可能性が強く、一般的な住居群が立地的要因以外で掘立柱建物を住居として採用しているといえることができるだろう。

掘立柱建物は、構造上の特性から湿地に適した建物であることはいまでもなく、はじめに述べた宮本氏の説をはじめとした多くの論考がある。しかし、ここでみた例から考えると、少なくとも福岡県下においては、それだけではなく堅穴住居に適する環境下においても住居として掘立柱建物が採用されている可能性がある。また、すでに想定されているとおり大型建物をもつような集落に掘立柱住居が集中する現象は認められるものの、決して独占的というわけではなく周辺の一般的な居住域においても普遍的に存在していたことも認められた。

5. おわりに

以上、3遺跡の分析から、それぞれにおける掘立柱住居の可能性と採用に関する検討を行い、上記のような大まかな結果を得た。しかし、ここで挙げた遺跡はあくまで福岡県下に所在する遺跡の一部である。したがって、全体的な様相としては多くの不備が残るものである。また、掘立柱住居の採用過程を検討するための時期的な考察も行っていない。採用過程をさらに詳しく把握するには、その他の遺構とあわせ広く集成するとともにそれらの時期も考慮する必要がある。このような問題は本文中における個々の建物の検討不足とあわせて今後の課題としたい。

本稿は、西南学院大学2012年度学内GP「国際文化研

大学院生のスキルアップに関する実践的取組]における「先進研究奨励の助成」による研究成果の一部で

ある。

参考文献

- 石野 博信 1990 『日本原始・古代の住居の研究』 吉川弘文館
- 石野 博信 1995 『古代住居のはなし』 吉川弘文館
- 江崎靖隆編 2007 『潤地頭給遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第96集
- 江野道和編 2005 『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書第89集
- 江野道和編 2006 『潤地頭給遺跡Ⅰ』前原市文化財調査報告書第93集
- 小笠原好彦 1979 「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻 第4号 考古学研究会
- 下村 智編 1995 『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集
- 杉原敏之編 1999 『以来尺遺跡Ⅲ』一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集
- 高倉 洋彰 1995 『金印国家群の時代』 青木書店
- 武末 純一 1987 「北九州市・曾根平野の首長居宅(予察)」『古文化談叢』第18集 九州古文化研究会
- 秦 憲二編 1997 『以来尺遺跡Ⅰ』一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集
- 広瀬 和雄 1978 「古墳時代の集落類型－西日本を中心として」『考古学研究』第25号第1号 考古学研究会
- 松村道博編 1995 『雀居遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集
- 松村道博編 2000 『雀居遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第635集
- 横山邦継編 1995 『古武遺跡群Ⅶ－弥生時代の掘立柱建物の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第437集
- 力武卓司編 2001『雀居遺跡6 雀居ムラのガイド・データブック』福岡市埋蔵文化財調査報告書第677集
- 力武卓司編 2003 『雀居7』福岡市埋蔵文化財調査報告書第746集
- 力武卓司編 2003 『雀居8』福岡市埋蔵文化財調査報告書第747集
- 力武卓司編 2003 『雀居9』福岡市埋蔵文化財調査報告書第748集